

デジタルデトックス

○登場人物 ※太字のみ出演

中島……大学生

関口一樹……かつて中島と同じクラスだった。大学生。

中村静香……中島と同じゼミ。

川西健……大学一年のとき、中島と仲が良かった元友人。

○ホール

大学の学生ホールみたいなどころ。

椅子が二つある。

関口が座っている。

そこに、中島がやってくる。

中島、鞆を持っている。

中島、関口に気づいていない。

関口「おい」

中島「(気づいて)」

関口「中島でしょ？」

中島「あ、うん」

関口「無視すんなよ」

中島「なに……してんの？」

関口「座って」

中島「え？」

関口「座って」

中島、関口の対面の椅子に座る。

鞆は、椅子の横に置く。

中島「なに？」

関口「スマホ貸してくんない？」

中島「え？スマホ？」

関口「え。やだ？」

中島「いや」

関口「昨日、なくしちゃってさ。スマホ」

中島「昨日って」

関口「飲み会」

中島「あー。そこで無くしたの？」

関口「んーうん。それ以外、考えつかないし。持ってたよね。昨日。俺」

中島「それは……そうじゃない？待ち合わせときに」

関口「そうじゃなくて。机に置いてたでしょ」

中島「う、ん。いや、でも自信ない」

関口「なんで？隣に座ってたじゃん」

中島「でも、すぐ席移動してたでしょ？」

関口「でも、見たでしょ？」

中島「覚えてないよ。あんまり。……あれは？居酒屋は？電話した？」

関口「した」

中島「そっか。でも、なかったんだ」

関口「だから、スマホ貸してって」

中島「電話かけるってこと？」

関口「そう」

中島「……」

関口「なに。その感じ」

中島「いや」

関口「それ以外の方法ある？だから、俺ここでさ、誰か来ないか待ってたわけだから」

中島「そう、だよね」

中島、関口にスマホ渡す。

関口「(受け取って)パスワード」

中島「あーそっか(スマホ取ろうと)」

関口「(スマホを渡す)」

中島、パスワード入力して、

中島「(渡す)はい」

関口、スマホをスクロールしながら、

関口「どうしよう。まあ、健からか」

中島「うーん。まあ、でも(※)、向かいの席だったし」

関口、※の時点でもう、川西に電話をかけている。

関口「あれ、出ないな」

関口、もう一度川西に電話をかける。

関口「あ、健？俺のさ、スマホ知らない？持ってたらしらない？今困っててさ。連絡しように

もできないし。……あ、ごめん。そうそう。中島の、スマホ借りて。そう。ごめんごめん。

びっくりした？あー、そっか。ていうか、めっちゃ電車の音すんだけど。……え？あー、

知らないかー。うん。まあ、いいや。なんか思い出したら、連絡して。うんそう。ここに」

関口、電話を切る。

中島「どう、だった？」

関口「(笑って)んーうん」

中島「なに？」

関口「中島ってさ、健と仲良かったよね？」

中島「あーうん。クラス一緒だったし」

関口「あーそうだよ。そうそう。一年のとき、なんかずっと一緒に居たイメージ」

中島「ずっとかどうかは知らないけど」

関口「でもさ。なんか、びっくりしてたよ？」

中島「びっくり？」

関口「急にさ、電話かけたら」

中島「あーそりゃ、びっくりはする、でしょ」
関口「なんで？」
中島「……え？いや、だって」
関口「昨日もあんまり話してなかったよね？そーいえば」
中島「今、別に関係なくない？」
関口「ずっと気になってて。それ。なんか、仲良かったはずなのに、なんか距離？みたいな
のあったから」
中島「ないよ。別に」
関口「もしかして、俺のせい？」
中島「は？」
関口「サークルでつるむようになってき、疎遠？になったんじゃないの？」
中島「え。だから？」
関口「だから、俺のせいなのかなって」
中島「そんなこと、一言も言ってないけど」
関口「LINEとかしてんの？」
中島「……え？」
関口「だから、最近連絡してんのって」
中島「関係なくない？いま」
関口「そうかな？」
中島「ないでしょ。関係ないでしょ。いま、関口のスマホがないって話してるんだから」
関口「うん。でも、なんか気になったから」
中島「なんかってなに？」
関口、スマホを見ながら、
関口「ごめんごめん」
中島「だから、関係ないだろうって！」
関口「え？」
中島「……は？」
関口、スマホから顔を上げて、
関口「あ。見てないよ。別に」
中島「……なにが？」
関口「別に、LINEなんか見てねえよって」
中島「……は？」
関口「え？それが、怖かったからじゃないの？いま」
中島「え。普通に、違うんだけど」
関口「ごめん。ごめん」
関口、スマホを見ながら、

関口「あれ？静香と「Z」交換してないの？ないんだけど」
中島「……」
関口「え？してないの？ゼミ一緒なんだよね？中村静香と」
中島「グループがあるから」
関口「あ。へー。そういうこと、なんだ。じゃあ、追加するわ」
関口、静香に電話をかける。
関口、スマホを耳に当てたまま、
関口「ていうかさ、電話かけてもでないか。急に、お前から電話あったら」
中島「……」
関口「え？自分でさ、どう思う？出ると思う？」
中島「知らない」
関口「俺は出ると思うけどなー。逆に」
中島「自分で、覚えてないの？」
関口「え？」
中島「自分で、どこで落としかとか、覚えてないの？」
関口「なに。急に」
中島「だって、おかしいでしょ」
関口、スマホを耳から離して、
関口「なに。おかしい？俺が？」
中島「ちゃんと探した？自分で持ってた、とかじゃないの？」
関口「それはないでしょ。さすがに」
中島「だって、そういうところあるじゃん」
関口「なに？そういうとこって」
中島「とりあえず大騒ぎするだろ？」
関口「大騒ぎ？」
中島「そう」
関口「え。大騒ぎってなに？具体的には？」
中島「だから」
関口「何も知らないだろ。お前は。何にも知らないでしょ。たいして、俺ら喋ってもないよ
ね。今まで、マジで、ほとんど話してこなかったじゃん。そうでしょ？」
中島「よく聞くから」
関口「遠くで、でしょ。外野なんだから。いつだって」
中島「……」
関口「何言っちゃってんの？」
中島「……」
関口「まあ、いいや」

関口、スマホを中島に渡す。

少し戸惑いながら、受け取る、中島。

関口「(席を立てて) 静香から電話あったら出といて」

関口、立ち去る。

少しして、中島のスマホが鳴る。

中島、静香からの電話に出て、

中島「あーごめん。急に。実はさ……え？……なんで、知ってるの。……うん。え、二回目なの？ スマホなくしたの。えっと……なんで？……うん。え？ サークル、辞めてたんだ。うん。あー川西と喧嘩して。え、でも、川西知らないって言ってたけど。スマホがないって電話したら。そう、知らないって。あ、うん。そう。俺のスマホ使って、関口が電話して」

少し間が空いて、

中島「それ、本人知ってるの？ うん。……え？ だからって何？ あ、だから、俺のスマホで電話したこと？ えっと……なんで？ わかんないって。こっちだって、わかんないよ。わかんないでしょ。普通。うん。うん。……それさ、本当はわかってるんじゃないの？ いや絶対そうでしょ。うん。いや、俺だって興味ないけど。でも、理由わかんないのも怖いから。うん。それは、そうだよ。うん、いいよ。別に、それは気にしなくても。……あー、そういう感じかー。とりあえず、わかった。うん」

電話を切る、中島。

中島、川西に電話をかける。

中島「……あ、川西？ 今、大丈夫？ さっき電車の音が、みたいな話してたから。うん。あ、そうそう。さっきさ……え？ あー、いや俺も困ってさ。うん。そう。いや、なんか学生ホール普通に通過しようとしたら、おいて声かけられて。急にそう、関口に。で、座れ、スマホ貸せて。いや、まじで意味わかんなくて」

少し間が空いて、

中島「ていうかさ、LINEブロックしてるって、聞いたんだけど。関口の。それ本当？ うん。あ、本当なんだ。え、でもなんで？ 喧嘩したっていうのは聞いたけど。……それだけ？」

少し間が空いて、

中島「え、あー、いやだからさ、中村さん、中村静香、さんに、だからスマホ貸してって俺に言ったんだよって言われて。誰からも連絡がつかないから、反応が欲しくてそうやってるって。いや、意味わかんなくて。だってさ、二回目なんですよ。スマホなくしたの。さすがに、二回もやらないでしょ。だって、同じ方法なんですよ。前も。誰からも飲み会誘われてないのに。聞き出して参加して。そこで、わざとスマホ落として。なんで笑ってるの？ だって、さすがにさ、そのままやらないでしょ。変えてみるでしょ。普通。うん。……それ、中村さんも言ってたよ。もう疲れた。付き合いきれないって。だけど、マジだったら？ 二回目なんだから」

少し間が空いて、

中島「いや、だから、なんで笑ってんの？巻き込まれたこっちの身にもなってよ。……マジにはなってないよ。だけど。いや、そうだよ。外野だよ。うん。何も知らないけど。でも、もう踏み入れちゃったから。それこそ、入れてもらわないと。困るよ。普通に。困るよ」

少し間が空いて、

中島「うん。いや、お疲れって言うなよ。こっちはまだ、終わってないから。いや、今は、いないよ。うん。でも、話聞いている感じだと、絶対戻ってくるでしょ。これ。だって、俺が来るまで、ずっと一人で、学生ホールいたからね。馬鹿みたいに。そう。スマホ触らずに。……聞いている？聞いてないでしょ。絶対。……え？だから。だから！電車の音、うるせえんだよ。さっきからずっと」

電話を切る、中島。

少しして、関口が帰ってくる。

関口「きた？電話」

中島「きてない」

中島、自分のスマホを持って、席を立って、

中島「トイレ」

中島、立ち去る。

関口、辺りを見回して、ズボンのポケットから、自分のスマホを取り出す。

スマホの電源を入れる、関口。

関口、席を立って、自分のスマホを、中島の鞆に入れようとする。

が、関口のスマホに着信音。

少し遅れて、スマホを耳に当てた中島が、帰ってくる。

関口「……」

中島「きつも」

完